

報 告

福祉学科学生の福祉ボランティア活動に関する実態調査

荒木 剛* 山本 佳代子** 通山 久仁子**

〈要 旨〉

本調査は、福祉学科学生の福祉分野におけるボランティア活動（以下、福祉ボランティア活動）の実態及びボランティア活動に対する意識の把握を目的として実施した。福祉学科2年生から4年生を対象に質問紙による調査を行い、228人（回収率88.4%）からの回答を得た。

その結果、①2010年度に福祉ボランティア活動を行った学生は、回答者全体の約40%であること、②活動領域は子どもや障がい児領域が多いこと、③紹介経路の約50%がボランティア相談室であること、が明らかとなった。また、学生の福祉ボランティア活動への関心は高いものの、それが実際の活動へと結びついていない現状が明らかになり、(1)早期段階でのボランティア活動への支援、(2)活動に向けて動機を高める支援、(3)情報提供の工夫、(4)ボランティア科目の設置、などを課題として考察した。

キーワード：福祉学科学生、福祉ボランティア活動、質問紙調査

I はじめに—研究の背景と目的—

近年のボランティア活動への社会的関心の高まりに加えて、ボランティア活動の持つ教育的効果への期待から、数多くの大学において学生のボランティア活動を促進・支援する仕組みが整備されてきている¹⁾。本学福祉学科においても2008年度より「実習指導室・ボランティア相談室」（以下、相談室）を開設し、学生のボランティア活動の促進・支援に向けて体制を強化しているところである。具体的な取り組みとしては、ボランティア登録制の導入（希望者のみ）、メールによるボランティア情報の配信、ボランティア活動に関わる相談、ボランティア募集者との連絡・調整等を行っている。

2009年度にボランティア登録を行った学生は、福祉学科全体で130名（全学生数は389名）であり、相談室から情報提供を行ったボランティア活動27件のうち、実際に学生が参加したのは19件（延べ73名）にとどまった。しかし、相談室を介さずに個人的に活動を行ったり、また、ボランティア関係のサークル・団体において活動を行っている学生もいると考えられ、学生のボランティア活動の実態は正確に把握できていない。

こうした状況から、本研究では学生のボランティア活動の実態及びボランティア活動に対する意識の把握を目的とし、福祉学科学生へのアンケート調査を実施した。また、今回の調査結果を踏まえ、学生のボランティア活動の促進・支援に向けた取り組みを検討していきたい。

II 調査の概要

1. 調査対象者及び調査方法

福祉学科の2年生から4年生を対象に質問紙によるアンケート調査を実施した。2011年6月から2011年8月の間に講義等を利用して質問紙を配布し、回収箱により回収を行った。その結果、228名（2年：96名、3年：80名、4年：51名、不明：1名）より回答を得た。回収率は88.4%であった。

2. 本研究が対象とするボランティア活動の定義

本調査ではボランティア活動について次の枠組みで定義した。①福祉分野における活動（以下、福祉ボランティア活動）であること、②実費（交通費・食事代等）

* 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科 講師

** 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科 助教

が支給される活動も含むこと、③大学の授業やゼミ活動の一環として行う活動は除くこと。また、活動実績については2010年度の活動のみを調査対象とした。

3. 調査内容

主な調査内容は、①2010年度の福祉ボランティア活動の有無、②2010年度の福祉ボランティア活動の内容(主な活動4つまで)、③福祉ボランティア活動への関心、④福祉ボランティア活動に対する意識、⑤福祉ボランティア活動を促進するために必要な大学の支援、とした。

4. 倫理的配慮等について

質問紙は無記名とし、個人の調査協力の有無や回答内容が特定されないよう回収箱により回収を行った。また、本調査の趣旨や手続きを説明する際に、調査協力の同意は自由であること、同意しないことで不利益は生じないことを十分に伝えた。なお、本調査は西南女学院大学倫理審査会の承認を得て実施した。

Ⅲ 調査の結果

1. 福祉ボランティア活動の実態

(1) 2010年度の福祉ボランティア活動の有無

回答を得た228名の中で、2010年度に「福祉ボランティア活動を行った学生」は86名(37.7%)、「福祉ボランティア活動を行わなかった学生」は142名(62.3%)であった。

また、学年別に福祉ボランティア活動の有無を見ると、2010年度に活動を行ったと回答した学生が2年生では21.9%、3年生では40.0%、4年生では64.7%となっており、学年が上がるごとにボランティア活動

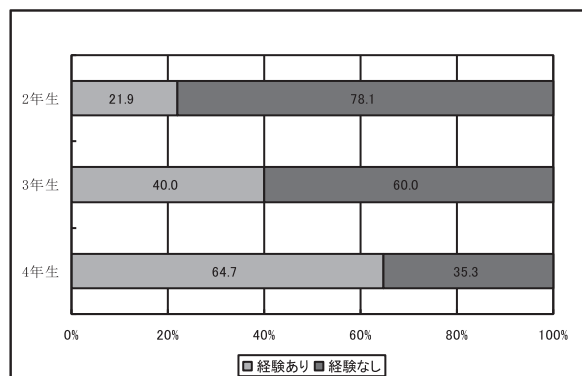


図1-1 学年別にみた福祉ボランティア活動の有無

への取り組みが活発化している(図1-1)。

(2) 福祉ボランティアの活動期間

活動期間については、年間を通して定期的に活動を行った「通年」が23.4%、ある一定の時期・期間に定期的に活動を行った「一定期間」が9.7%、1回きりの活動にその都度参加した「単発」が64.3%となっている。単発での活動が60%以上となっているが、単発での活動は時間的な調整がしやすく、また活動に伴う負担も比較的少ないため、こうした傾向になっていると思われる(図1-2)。

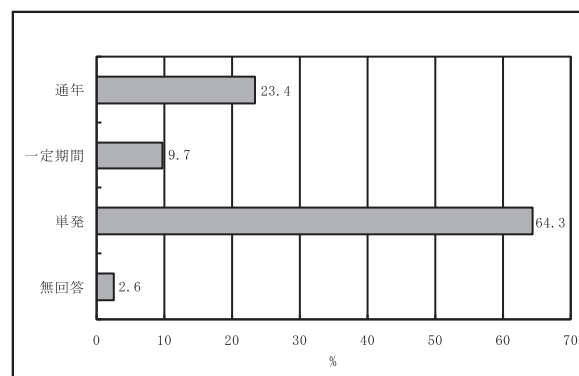


図1-2 福祉ボランティアの活動期間

(3) 福祉ボランティアの活動領域

福祉ボランティアの活動領域は、「高齢者」16.5%、「子ども」28.2%、「障がい児」31.8%、「障がい者」20.6%、「その他」2.4%となっており、障がい児や子どもを対象とした領域での活動が多くなっている(図1-3)。こうした背景として、相談室に募集依頼されるボランティア活動については、子どもや障がい児領域のものが多く、また本学の学生が子どもを対象とした活動を好む傾向にあることが考えられる。

なお、この領域での具体的な活動場所としては、児童館、学童保育、特別支援学校、知的障害児通園施設などがある。

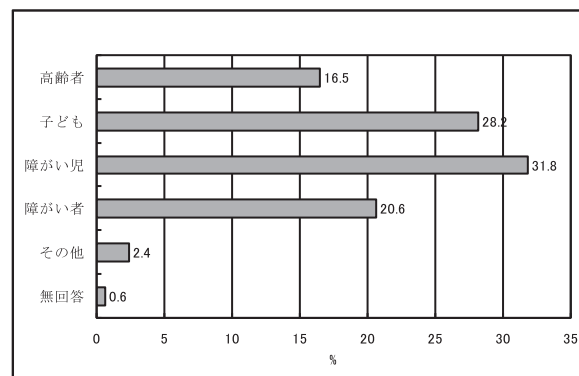


図1-3 福祉ボランティアの活動領域 (MA)

(4) 福祉ボランティアの活動内容

福祉ボランティアの活動内容については、「スポーツ・レクリエーションの補助」33.6%、「イベント・行事の手伝い」22.9%が特に多くなっている。レクリエーションやイベント・行事は、短期間に多くのマンパワーが必要であり、こうした機会に多くの学生がボランティア活動を行っていると思われる。また、大会やイベント運営の補助、職員のサポート等を行う場合が多く、学生にとっても比較的取り組みやすい内容となっていると言える（図1-4）。

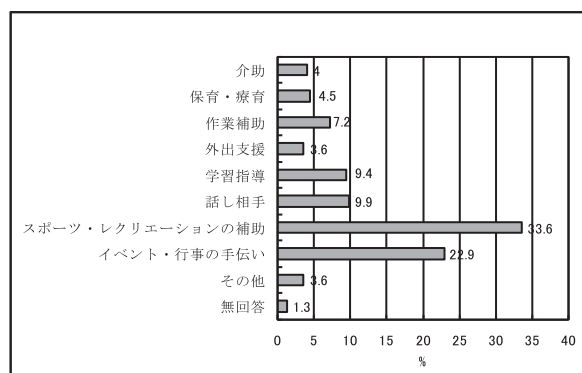


図1-4 福祉ボランティアの活動内容 (MA)

(5) 福祉ボランティア活動の紹介経路

主な紹介経路としては、「ボランティア相談室」48.7%、「友人」25.0%となっている。このことから、活動の約半数が相談室からの情報提供によるものであることがわかる。また、友人が紹介経路となっていることから、友人同士で誘い合わせて活動に取り組むケースも多いと思われる（図1-5）。こうした背景として、一人で活動することに不安やストレスを感じる学生も多いことが推察される。

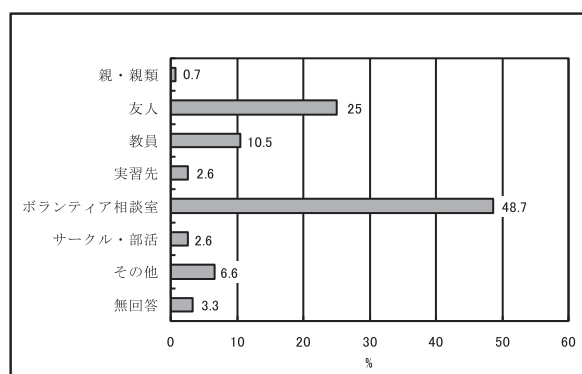


図1-5 福祉ボランティア活動の紹介経路

2. 福祉ボランティア活動への関心・意識

(1) 福祉ボランティア活動への関心

福祉ボランティア活動への関心については、「ある」48.2%、「ややある」43.4%、「あまりない」6.6%、「ない」1.8%となっており、90%以上の学生が活動への関心を示している（図2-1）。

一方、福祉ボランティア活動への関心が「ある」「ややある」と回答した学生で、2010年度の活動経験のなかった学生にその理由を尋ねたところ、特に多かった回答としては、「アルバイトで時間がない」46.4%、「きっかけがない」41.6%、「授業や勉強で時間がない」34.4%であった（図2-2）。そこで、2010年度の福祉ボランティア活動の経験とアルバイトの関係について見たところ、アルバイトを行っている学生もそうでない学生も、福祉ボランティア活動の経験に差はなく、アルバイトは活動経験の有無に大きく影響しないことが明らかとなった（図2-3）。このことから、学生の福祉ボランティア活動に対する優先度が、アルバイトや学業に比べて低いことがうかがえる。

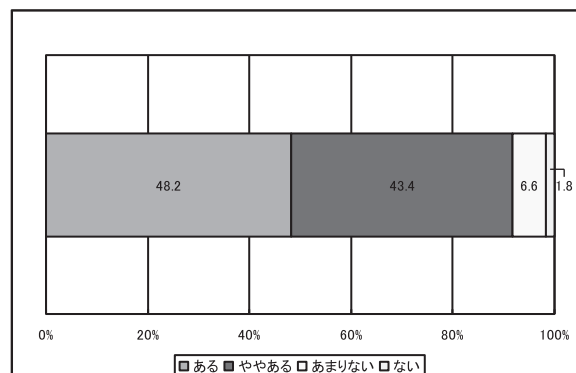


図2-1 福祉ボランティア活動への関心

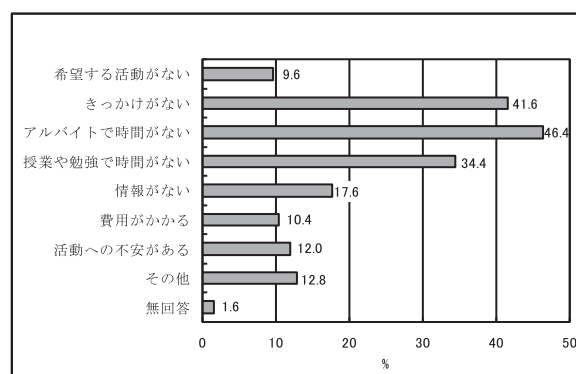


図2-2 2010年度に福祉ボランティア活動をしなかった理由 (MA)

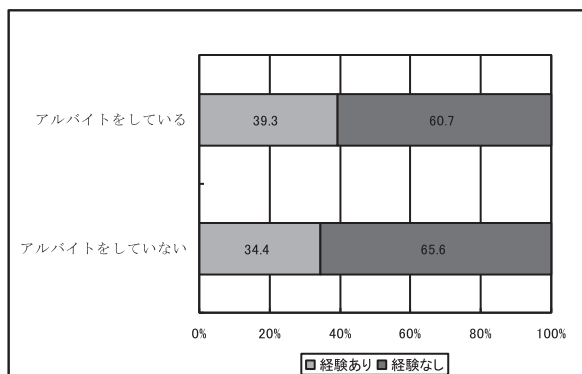


図2-3 2010年度の福祉ボランティア活動経験とアルバイトの関係

(2) 福祉ボランティア活動の良いと思う点

特に多く見られた回答は、「視野が広がる」78.9%、「様々な人と出会える」67.0%、「人の役に立つ」61.2%であった(図2-4)。

これらを活動の経験別に見てみると、活動の経験のない学生は、活動経験のある学生と比べて「人の役に立つ」の回答が多い。また、活動経験のある学生は、活動経験のない学生と比べて「視野が広がる」「様々な人と出会える」の回答がやや多くなっている。

活動経験のない学生は、ボランティア活動を「他者のため」という一般的なイメージでとらえがちである

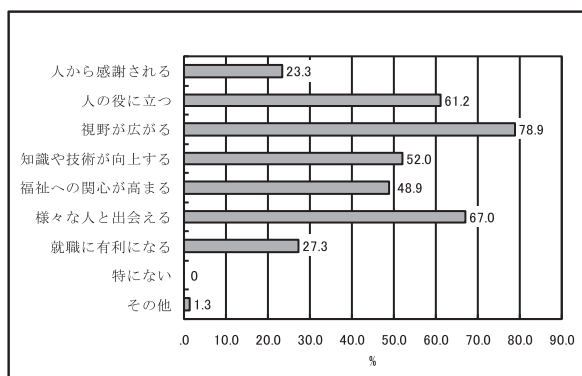


図2-4 福祉ボランティア活動の良いと思う点 (MA)

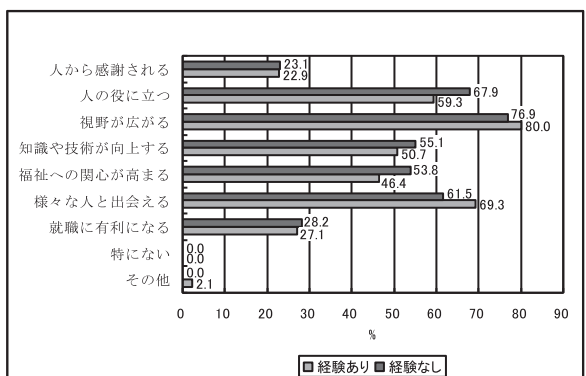


図2-5 福祉ボランティア活動の良いと思う点 (経験別)

のに対して、活動経験のある学生は、そうしたイメージに加え、自らも得るものがあることを実体験から認識したと推察される。

(3) 福祉ボランティア活動で大変だと思う点

福祉ボランティア活動で大変だと思う点として、「利用者との関係」64.7%、「知識や技術が必要」58.7%、「職員との関係」34.2%、「時間が割かれる」31.1%が多く見られた(図2-6)。特に「利用者との関係」「知識や技術が必要」は半数以上の学生が回答しており、具体的な利用者像が分からない中で関係形成を図っていくことや援助技術が未熟なことに対する不安の表れだと思われる。

また、活動の経験別の回答では、「職員との関係」と「お金がかかる」において大きな差が見られた(図2-7)。「職員との関係」では、活動経験のあった学生の回答が少なくなっており、実際の経験上、職員との関係に難しさを感じなかったことがうかがえる。しかし、「お金がかかる」は活動経験のあった学生の回答が多く、実際に活動をする中で金銭的な負担感を感じていることがわかる。

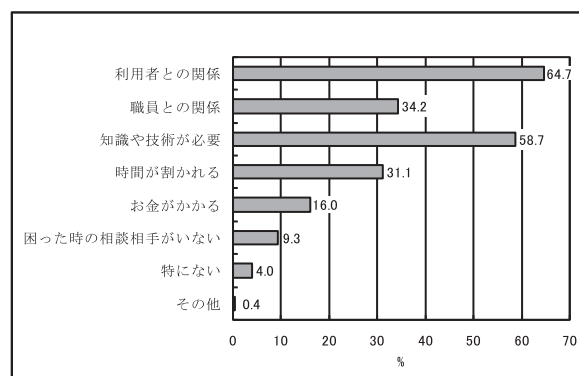


図2-6 福祉ボランティア活動で大変だと思う点 (MA)

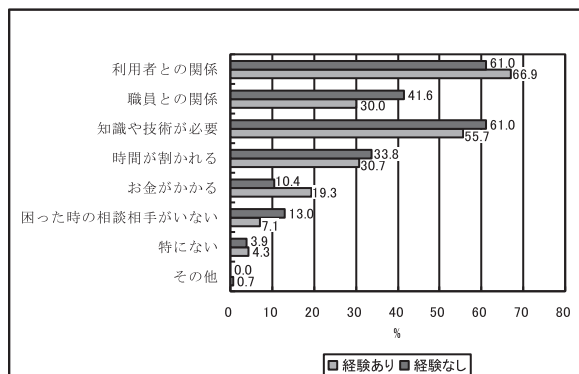


図2-7 福祉ボランティア活動で大変だと思う点(経験別)

(4) 福祉ボランティア活動を行う上で大切だと思う点

福祉ボランティア活動において大切だと思う点は、「ルールやマナー」77.1%、「積極性」76.2%、「明るさ」73.6%、「責任感」65.2%といった回答が多く見られた(図2-8)。これは、学生が活動を行う上でボランティアとしての基本的な姿勢や態度を重視していることがわかる。

活動の経験別の回答では、「知識や技術」と「明るさ」においてやや差があり、活動経験のあった学生の回答が多くなっている(図2-9)。

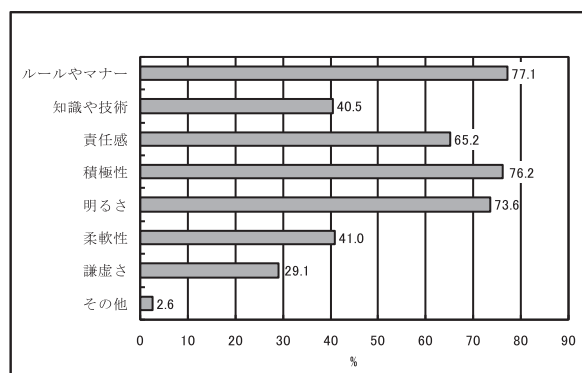


図2-8 福祉ボランティア活動を行う上で大切だと思う点 (MA)

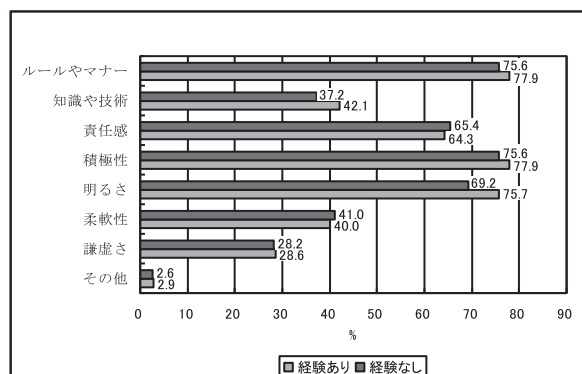


図2-9 福祉ボランティア活動を行う上で大切だと思う点 (経験別)

(5) 福祉ボランティア活動を促進する大学の支援

大学による学生の福祉ボランティア活動を促進する支援としては、「情報提供の機会を増やす」58.9%が特に多くなっており(図2-10)、大学による有効な情報提供の方法については、「メール配信」「教員からの声かけ」が多く見られた(図2-11)。

現在、相談室ではボランティア登録を行った学生に対して、メールによる情報提供を行っているが、2010年度の活動実績からもこうした方法が効果的なことが明らかである(図2-12)。

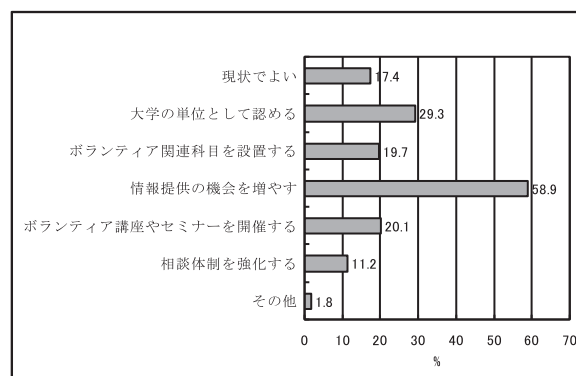


図2-10 福祉ボランティア活動を促進する大学の支援 (MA)

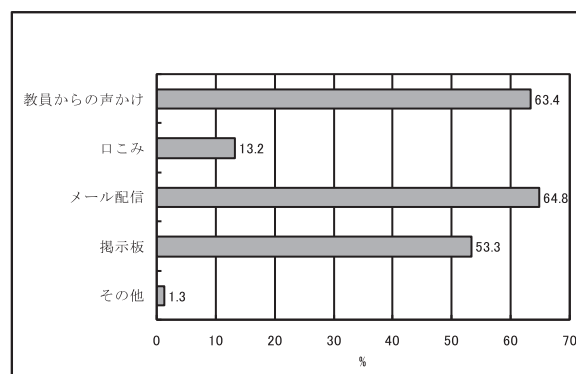


図2-11 大学が行う有効な情報提供の方法 (MA)

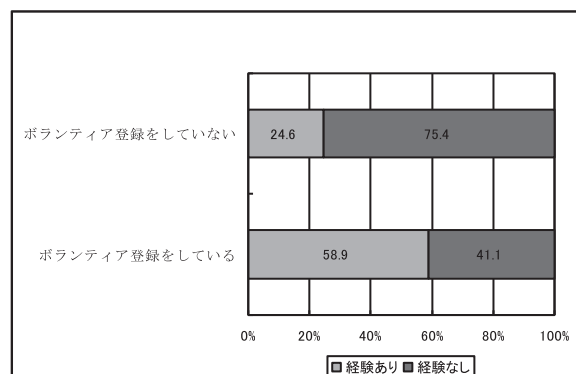


図2-12 ボランティア登録を行っている学生と福祉ボランティア活動経験の関係

IV 福祉ボランティア活動の促進・支援に向けた課題

最後に本調査の結果を踏まえ、今後、学生の福祉ボランティア活動を促進・支援していくための課題について述べたい。

1. 早期段階での福祉ボランティア活動への支援

本調査の結果では、1年次での福祉ボランティア活動が低調であった。大学入学後間もない1年次は、様々

な局面で新しい環境への適応が求められ、学生はボランティア活動に取り組む精神的な余裕を持っていないことが推察される。また、授業数も多く、時間的な限界もあると言える。

しかし、ボランティア活動での様々な経験を通じて、学生は自己の将来像や職業イメージを具体化し、福祉専門職に向けて学習や実習への意欲を高めることができると考えられる。ボランティア活動は福祉専門職の養成という点でも大きな教育効果を持ち、このような活動を学生生活の早い段階で経験することは、大変重要であると考え²⁾。

2. 福祉ボランティア活動への動機づけに向けた取り組み

本調査では、学生が福祉ボランティア活動への関心を持ちながらも、「きっかけがない」との理由で活動を行っていないとの現状が明らかとなった。しかしその一方で、活動のきっかけの一つとなるボランティア情報の有無に関する調査項目では、「情報がない」との回答は少なく、学生はボランティア活動の情報を持ちながら、それが実際に活動を行うきっかけとはなっていない現状が推察された。

こうした点から、相談室では2011年度より4月のオリエンテーション期間中に全学年を対象として1コマのボランティア講座を実施している。この講座では相談室の機能・役割を紹介するとともに、ボランティア情報へのアクセス方法や活動に向けた具体的な手続き等を説明している。

ボランティア活動への動機づけという点で、この講座は一定の成果を上げることができている³⁾。しかし、講座自体を受講する学生が限られているなど今後の運営に向けた課題も大きいと言える。

3. 福祉ボランティア活動に関わる情報提供の工夫

福祉ボランティア活動を促進する大学の支援として、ボランティアに関する情報提供の機会を増やすことが期待されていることから、再度、情報提供のあり方を検討する必要がある。現在、相談室が行っているメールによる情報提供が効果的なことは先に述べた。しかし、これはボランティア登録を行った学生のみを対象としており、まずはより多くの学生が登録を行うよう働きかけを強化していく必要がある。また、ボランティア情報に特化した掲示板の設置や掲示方法・スペースの工夫などを検討し、ボランティア情報へのアクセスを高めていく必要がある。

さらに、本調査では情報提供の方法として、教員からの声かけも有効なことが明らかとなっている。教員によるボランティア活動への直接的な声かけは、教員と学生との関係性に基づくものであり、学生がボランティア活動に踏み出す大きなきっかけとなると思われる。したがって、大学に寄せられるボランティア依頼に対して相談室や教員間での情報共有が重要になってくると言える。

4. ボランティア活動に関わる科目の設置

これについては、大学による福祉ボランティア活動促進に向けた支援の調査項目として設定したが、学生の回答は約20%にとどまった。しかし、福祉専門職を目指す学生にとって、昨今のボランティア活動の持つ意義や位置づけを理論的に理解しておくことは大変重要である。また、こうした理解の基にボランティア活動を実践することで、教育的効果がより一層高まると言える。

現在、福祉学科のカリキュラムにおいては、ボランティア活動に関わる科目が設置されていない。今後、これらを正規の科目として位置付けていくことが、学生のボランティア活動への理解や取り組みを促進する環境整備の一つになると考える。

V おわりにー本調査の限界と課題ー

本調査は学生のボランティア活動の中でも福祉分野における活動に限定し、活動時期についても2010年度のみを対象とした。また、4年生については調査スケジュールの関係ですべての学生に質問紙を配布できず、こうした点で本調査には限界があると言える。

しかし、本調査によって学生のボランティア活動に関する基礎的データは、一定程度得ることができたと考える。今後、ボランティア活動の促進・支援という観点から、さらに詳細なデータを収集する必要がある。特に、学生の生活全般の状況（授業、部活・サークル、アルバイト、余暇活動など）を踏まえた分析が必要であろう。

最後に、金子（1992）はボランティア活動を行う人を「切実さをもって問題にかかわり、つながりをつげようと自ら動くことによって新しい価値を発見する人」と述べている。今まさに私たちの社会は、一人ひとりが他者の抱える問題に対して「切実さをもってかかわり」、「つながりをつける」ことが求められている。

学生一人ひとりが改めてそのことの意味を問い直し、ボランティア活動に向けた一歩を踏み出せるよう、大学としても支援を行っていかねばならないと考える。

【注】

- 1) 例えば、北九州地区近隣の大学では福岡県立大学、福岡教育大学に学生のボランティア活動を支援する仕組みが整備されている。
- 2) こうした観点から、2007年度より福祉学科では1年生を対象に基礎実習（選択科目）を開講している。これは学生がそれぞれ希望する実習先においてボランティア活動を行うものである。筆者らは2008年度と2009年度に基礎実習履修学生にインタビュー調査を行ったが、そこからは様々な教育的効果が明らかとなった。
- 3) 相談室のこうした取り組みにより、ボランティア活動に参加する学生も増加してきている。2011年度は8月までの段階で、述べ80名以上の学生がボランティア活動に参加している。

【参考文献】

- 独立行政法人日本学生支援機構（2006）『学生ボランティア活動に関する調査報告書』。
- 三本松政之・朝倉美江編（2007）『福祉ボランティア論』有斐閣。
- 津止正敏・斉藤真緒・桜井政成（2009）『ボランティアの臨床社会学－あいまいさに潜む「未来」－』かもがわ出版。
- 金子都容（1992）『ボランティア－もうひとつの情報社会－』岩波書店。
- 森法房（2002）「山口県立大学における学生のボランティア活動に関する調査報告」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第8号，39-53。
- 谷田勇人（2001）「福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析」『社会福祉学』第41巻第2号，83-94。
- 荒川裕美子・吉田浩子・保住芳美（2008）「大学生の『ボランティア』に対する認識－医療福祉を学ぶ大学生を対象とした調査から－」『川崎医療福祉学会誌』第18巻第1号，203-211。
- 荒木剛・山本佳代子・通山久仁子（2009）「福祉専門職養成教育における現場体験のもつ意義－基礎実習履修学生の学びから－」『西南女学院大学紀要』vol.13，41-51。
- 荒木剛・通山久仁子（2010）「学生の対人援助観にみる現場体験の意義－『基礎実習』履修学生のインタビュー調査を基に－」『西南女学院大学紀要』vol.14，17-26。

Volunteer Activities in the Welfare Field among Students in a Department of Welfare

Takeshi Araki*, Kayoko Yamamoto**, Kuniko Tsuzan**

<Abstract>

The purpose of this investigation is to clarify the actual circumstances and the consciousness about volunteer activities in the welfare field among students in a department of welfare. This study was carried out by questionnaire investigation, and targeted the students in the 2nd to 4th year. In all, 228 replies were collected, and the response rate was 88.4%.

The results were as follows, ① about 40% of the students participated in volunteer activities in 2010, ② welfare fields which most students have participated in were either fields related to children and children with disabilities among the volunteer activities fields, ③ about 50% of all volunteer activities were introduced by means of a volunteer consultation room. In this study, it was found that even though students' concerns about the activities were quite high, it was not connected to their actual practices. Based on these results, the four areas of (1) to support for volunteer activities in the initial stage, (2) to support the promotion of the motivation for volunteer activities, (3) to devise the way of distributing information (4) to start a new course of "Volunteer studies" were discussed as our issues.

Keywords: students in a department of welfare, volunteer activities in the welfare fields, questionnaire investigation

* Instructor in the Department of Welfare, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University

** Assistant Professor in the Department of Welfare, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University